

40℃弱の高熱が続くということで、休診日の日曜日だが、急患として受け入れた。高3男子が両親に連れられて来院した。

咳などカゼ症状はなく、また、高熱の割に寝込む状態ではない。病院では原因が分らず、膠原病かもしれないと言われている。最近になって、食欲が落ち、今朝40℃になったので、解熱剤を飲ませた。今日はややノドが痛むと言う。

診ると、病能はよく分った。胸の下部、胸とお腹の境辺りに熱邪がある。典型的にはカゼをひいて、こじらせ、4～6日経った状態である。ただ、聞いても、カゼを引いた記憶はないようである。この状態は漢方では少陽病と言われ、小柴胡湯類を使う病態である。脈もこれに対応して、やや弦のような状態になっている。

「外患内傷」という言葉があるように、病は外からカゼのような邪毒が入って来る「外患」の場合もあれば、内から病む(既に内にある毒から邪気が発生して病ませる)「内傷」の場合もある。内傷だったのかもしれないが、いずれにしろ、小柴胡湯類が効く病態である。

ただ、胸下部の熱邪はこもっていて、表面に出て来ていない。舌を診ると、ぬれ過ぎている。つまり邪熱は周囲の水湿に阻まれて表面から放散されないでいる。

胸下部の熱邪を除くよう、胸・背、そして上下肢から経脈を通して、鍼灸施術を施した。

基本は小柴胡湯が効く病態だが、水湿が多く、それに対応するのに乾姜を加える必要があるが、日曜日で漢方薬局は営業していない為、とりあえず、小柴胡湯を勧めた。

結局、普通の薬局では、小柴胡湯は大容量のものしか無く、柴胡桂枝湯を買って飲ませたと、2日後來院した。食欲は少し出て来ていたが、体温は39℃台だと言う。

熱邪が胸下部にあり、こもっている病態は変わっていない。脈は前回のようやや緊張した弦のような脈ではないが、深いところで勢いがある。舌はやはりぬれ過ぎている。前回と同様の鍼灸治療を施した。今回は漢方薬局を紹介し、小柴胡湯加乾姜を勧めた。エキス顆粒製剤はないので、煎じ薬となる。

2日後、来院した。薬はまずく、1日分を煎じて、3回に分けて飲むところを2回しか飲まなかったようだ。小柴胡湯には既に生姜が入っている上に、乾姜を加えたから、かなり辛かっただろう。どちらもショウガだが、製法が違い、効能を異なっている。とにかく、うまく当たったようだ。2日目に大量に発汗して解熱し、36.3℃となったと言い、とても喜んでいた。

平熱が37.8℃位と言うから、下がり過ぎている。診ると、胸全体に軽い邪気があって滞っているが、前回のような重い邪熱はない。お腹の様子も変化し、前回なかったガスとツツパリがあった。

また2日後に来て貰った。体温はほぼ平熱になっていた。大きな問題はないので、治療は終了した。その後、母親が治療に来た時に、様子を聞くと、元気に学校へ行っているとのことだった。

後で聞くと、いつも扇風機で風を受けながら、寝たりしていたのだと言う。おそらく軽いカゼが入り、本来なら免疫力が働いて、外に出る様な発熱をするところが、扇風機の風で冷やされ、免疫力が働かず、カゼの邪熱が奥へ入り、こもってしまったのだろう。これは解熱剤などを早くから使った場合も起こり得る。また、高熱を下げようと解熱剤を使い続ければ、冷えの体質になったり、追い出されなかった熱邪は膠原病の原因となっただろう。(2015年7月小暑)